保健医療図書館ネットワークの組織化と展望　私案

今田敬子
国際医療福祉大学情報教育センター：図書館

抄録：保健医療図書館のネットワーク組織は、多くの利点はあるが、組織が教育制度の変化や、社会状況に対応し変革できていないとも感じている。

日本医学図書館協会（JMLA）に入会の基準があった当時、入会していた医系図書館でその後退会した図書館もある。

日本薬学図書館協議会（JPLA）は、薬科大学と製薬企業の図書館の団体だが、薬科系大学の増加に比例した薬価大学図書館会員数は増加していない。

JMLA も JPLA も創立時、図書館が会員単位としてきたが、現在はコンソーシア以外の活動は、研修や機関誌発行など図書館員個人の資質向上を目指す活動が多い。

Medical Library Association（MLA）は医学図書館員の個人会員で構成され、会員の関心で複数主題の部会に参加できる。図書館が会経費を負担しての運営ではなく、医学図書館員という専門職の団体である、

日本看護図書館協会（JNLA）は MLA をモデルに設立を考え、当初個人会員を想定したが、結果としては、団体入会でないと活動しにくいとの意見で団体中心組織となった。看護系大学に多い公立の場合、看護大学図書館に 2-3 年勤務後、公共図書館に異動するなど、看護図書館経験がない職員だけという図書館も多い。最近は医学・薬学図書館も職員数が減少し、専門知識の継承も課題である。

これらの図書館団体は、役員の成り手がない組織もあれば、何年間も同じ役員が名を連ねている組織もある。主題別に組織化せず、横断的組織として効率化をはかる事も、今後検討してはどうか。

保健医療福祉図書館連合は、個人会員制度とする事で、派遣やパート勤務者も、この組織の会員でなければ、医系専門司書としては勤務しにくい風潮を作る事で、資格認定も勤務条件として有効になる事を期待したい。

筆者所属の国際医療福祉大学は、日本初の医療福祉の総合大学として、医療職種の大学教育に取り組み「**チーム医療**」がキーワードでもある。しかし医療福祉関係養成機関例えばリハビリテーション関連職種や、医療技師等の養成機関は専門学校も多く、その図書館整備は充実しているとは言えない。共に働く医療従事者の情報格差を埋めることは、よりよい医療情報提供には必須である。患者向け図書サービスに先んじて医療従事者全般への有効な情報提供にも目を向けるべきと思う。これらの図書館の連携も視野に入れた保健医療関係図書館ネットワークも必要だと思う。

病院図書室に関しては紙幅がないため、口頭で言及したい。